

【 番 氏 名 】

二〇二〇年度 高等部三年生

一学期 実力試験

六十分

* 解答用紙提出先 → 平塚先生

* 提出先アドレス

平塚先生 → ayamehiratsuka@rikkyo.uk

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

最終氷河期が終った一万七〇〇年前に始まった完新世は終り、人類の活動が地球のさまざまなシステムを変え、それが地層に変化を与え始めているという見方が科学者の中に生れつつあることを知ったのは数年前のことである。その時の議論は、A現在を新しい地質年代とする必要があるところまで進んでおり、驚いた。

ここで、新しい地質年代を「人新世」と名づけたのが地質学者ではなく、オゾン層破壊の研究で一九九五年にノーベル化学賞を受賞したP・クルツツェンであるところに眼を向けたい。またそれを受けての専門家による議論の結果、「人新世」の始まりは一九五〇年という考え方が主流になっていくところが興味深い。一万年ほど前の農業の始まりや、一八世紀の産業革命も考慮されたが、やはり一九五〇年が有力のようである。その理由は、二〇世紀後半になってプラスチック、コンクリートなどの大量生産・大量消費時代に入り、土に戻ることはないこれらの物質がこれから長い間、aチクセキし続けるであろうという予測にある。このような構造物だけではなく、エネルギー大量消費、森林の破壊などによる大気中の二酸化炭素の増加による地球温暖化も問題である。更にプルトニウムなどの核物質が核開発によって地球にまき散らされた。これらの物質やそれがもたらした地球の変化は、現在の私たちの生活にさまざまな影響をもたらしていることは事実であるが、これが地層に恒久的な痕跡として残るのかどうかは改めてbケントウしなければならぬ。残らなければ新しい地質年代と呼ぶにふさわしくないからである。

専門家がどのような答を出すかは議論の結果を待つしかないが、実は私にはあまり関心がない。「人新世」という言葉が示しているように、今起きている変化の原因は他でもない人間自身にあるのだ。今考えるべきは、ここにあげられているさまざまな課題が、今ここの私たちの生活にどう影響しているかであり、必要なら私たちの生き方を変えることだと思うからである。

まず考えたいのは、地質に痕跡を残すと考えられている変化の時間が地質学での時間に比べて途轍もなく短いことである。私自身のことを考えると一九五〇年は中学生、自分自身にも社会にも責任を感じながら生き始める年齢にあたる。つまり一九五〇年からこれまでの六七年は私自身が一人の人間として、社会の一員として生きてきた時間と重なるのである。そこで、「人新世」という言葉のもつ「人」をどう受け止めるかという問いに対する答はまさに「私」になるわけである。もちろん、私一人が社会を動かしたわけではないし、むしろ本音はこんな社会をつくるためにいっしょけんめいはたらいってきたのではないという感覚の方が強いのだが、この時代を生きたという事実は否定できない。

クルツツェンが、地球環境の変化について語り合う専門家たちの議論を聞いて、「今は完新世ではなくすでに人新世に入っている」と思わず言ったその時の気持は、この変化の原因は私たち

人間の活動にあるのだということを確認したかったのではないかと想像している。その奥には、このままでよいのかという問いがあつたのだらうとも思う。B私も同じ思いを持つているからである。現代文明を批判的に見て生き方を見直そうという提案はこれまでも度々なされてきた。しかし、何も変わらなかったし、今も社会の指導者たちはこれまで通り成長のかけ声をかけている。

なぜ変わらないのだろうかという問いながら暮らしている者としては、今回の「地質年代まで変わるのではないか」という指摘はインパクトがあり、人々の行動や考え方を変えるかもしれないという期待を持たされるものではある。しかし、核抑止力などと言い、核兵器禁止条約への参加さえ考えようとしていない人達には何の影響も与えないだらうという声が、自分の中から聞えてくるのである。このまま進めば、恐らく今後地質年代が対象とする長さだけ人類が続くことは難しいであろうから「人新世」の議論は無意味となる。答はここにあるのではなからうか。

一九五〇年代を考える出発点はやはり第二次大戦の終結だらう。世界中の人を巻きこみ、終には原爆使用までした戦いに疲れ切り、言うなればすべての人が新しい世界を求めたのである。米ソの支配権争いはあつたが、冷戦という形であり、多くの人の願いは生活の安定であつた。

小学校四年生で敗戦を体験した私が求めたのは三度の食事を楽しみ、思う存分本が読める暮らしだった。科学技術によつて物の豊かさや便利さを生み出そうという大人たちのかけ声に、映画やテレビで知るアメリカの人々の暮らしが世界中に広がることを夢の実現だと考えた。

まだまだ社会全体が貧しい中で化学を学び、生物化学、更には分子生物学をcセンコウし、それを生かした仕事をしながら平和で豊かな社会で市民生活を送る自分を思い描いていた。ところが、六〇年代には、早くもこの未来に大きな疑問符がつくようになったのである。水俣病、四日市ゼンソクなど企業活動が原因の汚染と健康被害が日常の話題になり、一九六七年には公害対策基本法が生れた。一九六二年出版のレイチェル・カーソン著『沈黙の春』によつて、現代文明が「生きもの」へのまなざしに欠けていることに気づかされた。一九七二年には国連人間環境会議が開催され、それと合わせて（註）ローマ・クラブの委託で作られた『成長の限界』が出版された。当時作られた「宇宙船地球号」という言葉はほとんど使われることがなくなったが、ここでも今思い起こされる。これ以降のdケイイを述べることはしない。しかし、地球レベルの気象異常が見られる中で大国の大統領が第二回気候変動枠組条約締約国会議(COP21)による「パリ協定」からの離脱、核兵器禁止条約への不参加を選択する現状がある。被爆国でありながらそれに追隨するという選択も理解に苦しむ。

「私」は、人間は生きものでありそれを基本に置かなければC一九五〇年代初めに求めた未来は現実にはならないことに気づいているのに、リーダーたちが牽引する社会は、「人新世」という言葉を生む方向へ動いてきたのである。ここでの「私」は日本で暮らす普通の人であり、世界にも同じ仲間がたくさんいる。

地質学の時間を思考の中に取り入れるなら、宇宙の中での人間の位置づけを考えることになる。宇宙創成から一三八億年、太陽系が生れて四六億年、その中の一つの星である地球に生きものが生れてから三八億年、その中でホモ・サピエンスが生れたのが二〇万年前という歴史が見えてきている。その中で賢く生きるとはどういうことだろうと考えることができるようになった今、私たちにできるのは、文明を持ち始めてからの一万年を振り返りながら、Dこれから生き方を探ることだろう。

「人新世」の議論で気になるのは、今述べたように私たちが地球というシステムの中にいることは明らかであるのに、外からの視点で語られているところである。そしてこの地球が生きものとしての人間が暮らせないところになるであろうことを予測する人々は二つの選択を示す。一つは地球を捨てて他の星、たとえば火星に移住することである。第二は生物工学、サイボーグ工学、Eを駆使して暮らしていこうというものである。現実は今、政治家・経営者・科学技術者は、Fとイノベーションと称してこの方向への動きを明確な構想もなく進めている。この選択の先は、「地球に生れた生きものとしての」という言葉は消して、新人類誕生をイメージすることになるわけだが、イノベーションの提唱者たちはそれを支える理念・思想なしに経済と技術の側面から当面できることを考えているだけのように見える。

「楽道家であることでは人後に落ちないと思っているのだが、今の流れを見ると、その私にさえ滅亡への道を歩いているようにしか見えない。こんな社会を次へ渡すつもりではなかったという気持が強い。

これぞ正解という答を出せるとは思わないが、生命誌の専門家と日常生活を大切にしたいと願いながら暮らす生活者という二つの重なりからは、一三八億年の時の流れの中で生れたホモ・サピエンスとして生きるという、いわば平凡な選択が最も現実的だろうという答が見える。そして、三八億年もの長い間この地球で生き続けてきた生きものの一つとしての人間の中に組み込まれた生きる力を思う存分生かして、すべての人がそれぞれの生活を生き生きと暮らす日常がイメージできるのはその選択であろうと考える。たかだかこの五〇年で積み上げた現代文明と、宇宙に始まり生きものの中に組み込まれた生きる力のどちらが優れているかと問えば後者だろう。eフクザツさの中に豊かさを持つさまざまなくみを見るだけでも、それはわかる。

多様な生きものを仲間としながらその中で唯一、強力な想像力から生れる創造力を持つ人間として、社会制度や科学技術などをどのようにつくっていくか。その選択の中ではコンピュータも(注3)ゲノム技術もその使い方は自ずとさまざまであり、生きものとして生きる人々を支えることになるだろう。私個人は生命誌を基本に、「人間がつくりあげる文明の中で生きる私と三八億年の生命の歴史の中にいるヒトとしての私を重ね合わせた世界観」を持ち、すべてをこれに基づいて判断している。この方向が地球という星で、生き生き暮らす方法と考えてのことである。

もう一度まとめよう。「人新世」を地質年代とするか否かは専門研究者に任せたい。ただ、人間を生きものとして見る立場からは、それが意味あることとは思えない。「人新世」と思わず言わずにはいられない状態を続けたら、恐らく「人新世」を地質年代として見届ける人はいないだろうからである。

(中村桂子「人新世」を見届ける人はいるか」による)

(注)ローマ・クラブ地球の有限性という共通の問題意識を持った、世界各国の知識人で

構成される民間団体。

2 イノベーション技術革新。

3 ゲノム技術ー染色体や遺伝子を操作する技術。

問1 傍線部aとeのカタカナを漢字にしなさい。

問2 傍線部A「現在を新しい地質年代とする必要がある」とあるが、そのように考えられるようになったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 第二次大戦で原爆が使用されたばかりか、その後も抑止力の名目で核開発が継続されたことで、プルトニウムなどの核物質が撒き散らされ、大気や土壌だけではなく地質までもが完全に変容してしまう可能性があるから。

② 二〇世紀後半になって急速に進歩発展した科学技術の恩恵を受けてきた人間が、それ以降も副産物として生じた環境破壊にまったく対処しなかったことで、地球システムがいつのまにか変容してしまった可能性があるから。

③ 一万年ほど前の農業の始まりから、一八世紀以降の産業革命を経て、二〇世紀後半に至り豊かな物質生活を求める人々の欲望に応える大量生産時代に入ったことで、大量の廃棄物が産出されるようになったから。

④ これまで自然界には存在しなかった物質を大量に排出し、地球環境システムに多大な変化をもたらすことによつて、人間の活動が地層にまで長期的かつ根本的な影響を与える可能性が生じているから。

問3 傍線部B「私も同じ思いを持っている」とあるが、「同じ思い」とはどういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 人間の活動が現在の危機的状況を引き起こしていることを自覚し、物質的な豊かさや便利さを追い求めてきた自分たちの生き方そのものを、批判的に見直していく必要がある。

② このまま地球環境が破壊されていけば人類の破滅を招くということを冷静に認識した上で、社会の指導者達に働きかけて彼らの考えを環境保全へ向けさせていかなければならない。

③ 地球上の生物はすべてが運命共同体の構成員であるという「宙船地球号」の基本理念に立ち返り、各国は目先の利益にとらわれずバリ協定や核兵器禁止条約に賛同した方がよい。

④ 地質に既に不可逆的な変容が生じているという点で現在を「人新世」と呼ぶべきだという認識を共有し現代文明に批判的な眼差しを向けつつ、人間の行動や考え方を改めるべきである。

問4 傍線部C「一九五〇年代初めに求めた未来」とあるが、当時の筆者が思い描いていた「未来」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 戦争のない世において、めざましく進歩発展してゆく科学技術によって、アメリカ人が享受しているような物質的に豊かな暮らしが現実のものとなる未来。

② 科学技術の進歩が必ずしも幸せをもたらすものではないと自覚しつつも、大量生産・大量消費システムによって物質的な豊かさが最大限に謳歌できる未来。

③ 平和な世の中で自分が身につけた学問知識を仕事に生かし、日々の食事や好きな読書をおきなく楽しめるような、平凡な日常を大切にすることができる未来。

④ プラスチックなどの自然界に還らない人工物が放置され、核開発によるプルトニウムなど核物質が拡散されるといった問題がない、地球環境が健全に保たれた未来。

問5 傍線部D「これからの生き方」とあるが、それについて筆者はどのように考えているか。

その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 人間は、地球ばかりか宇宙全体の成り立ちまでも視野に入れて物事を想像し、また地球環境そのものに創造的に介入することができる生きものであることを自覚し、地球上の生命を保護するという自らの使命をまっとうできる生き方を模索するべきである。

② 人間は、科学技術の発達によって地球環境に甚大な被害を与えてきたが、人類だけが持つ強力な想像力と、そこから生まれる自由な創造力を駆使して、多様な生きものを仲間としながら、破壊されかけた地球環境を回復していく生き方を模索するべきである。

③ 人間は、地球というシステムを対象化してとらえることのできる唯一の生きものだという利点を生かし、他の惑星に移住することやイノベーションを推進し、や生物工学を利用しつつ豊かに暮らすことをも視野に入れた賢い生き方を模索するべきである。

④ 人間は、宇宙の歴史において誕生した地球というシステムの中で生きものとして存在することを自覚し、社会制度や科学技術といった人間固有の創造的な営みを通じて、地球環境の中で多様な生命と共存し続けることのできる生き方を模索するべきである。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

次の文章は、林真理子の小説「本を読む女」の一節である。万亀は、東京の女子専門学校を卒業し教師をしていたが、母の求めにしたがつて帰郷し、祖母の世話を任された。本文はその続きの部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

昭和十三年の秋に行なわれた福の葬式は、大層質素なものであった。

店員の何人かは入隊していたし、近所でも戦死する者が始まって、a天寿を全うした老婆の葬儀を、大げさにすることはばかられる空気は確かにあったのである。

それにしても、親戚の中でも福に近い者たちはひそひそと囁き合う。あれだけ派手なことが好きな芙美さんがどうしたことだ。あの婚礼の時とはえらい違いではないか。

婚礼というのは、秋次が嫁をとった時のことで、その時の盛大さは今でもこのあたりの、語りぐさになっている。甲府から板前を呼んで、決まりの膳とは別に伊勢海老や鯛の刺身をどつさと籠に盛った。その豪勢さに、山国の人たちは目をむいたものだ。

婚礼は二日間にわたって繰り広げられ、近所の人々からは「一箱ひっくりけえした御祝言」と言われたものだ。一箱というのは、千両箱の譬えであるが、かなりの額がかかっただろうと、皆はふんだわけだ。

いくら跡とり息子と老人の差だといつても、あの婚礼に比べ、この葬式はあまりにも淋しすぎる。坊さんも一人しか来ないではないか。やはり嫁姑の**b**確執は本当だったのだと領き合う者も少なくなかった。

こんな雑音もいくつか耳に入ってきたが、万亀はひたすら悲しみに酔っていた。Aどうしてこれほど泣けるのだろうかと自分でも不思議に思ったほどだ。

「そりゃあ、無理もねえ、あんたが婆ちゃんのめんどろをみててくれたんだもんなあ。がつくりくるのはあたり前だ」

芙美はそんなふうに解釈するのだが、万亀の思いはもちろんそれほど単純なものではない。

一年近い看病の間、本気で福を憎いと思ったことがある。福が亡くなってくれさえすれば、自分は自由になれるのだとも考えた。その記憶が万亀を責める。どうしてもとやさしくしてやれなかったのかとせつなくなる。

が、それと同時に万亀を苦しめているのは、これからどうなるのかという不安だ。福が死んだいま、自分は好きな道を選ぶのかもしれないのだが、それが実は怖いのだ。病室で本を読む生活がいちばん合っているような気さえしてきたこの頃だ。

満州へ行きたいという気持ちだけは変わらないが、二十四をすぎた自分にまだ可能性はあるのだろうか。

その年の暮れから、翌年にかけての、時の流れる早さは、万亀が初めて経験するものであった。それまでゆるやかに過ぎていた日々が、突然すさまじい早さで音をたてて流れ始めた。そんな気がする。

砂糖や粉が入手しづらくなって、一日中駆けずりまわる芙美に替わり、B万亀がいつのまにか店を切り盛りするようになった。

さすがにマンドリンやギターこそ弾かなくなったものの、秋次は相変わらず遊び仲間と玉突きに出かけたり、秘かに花札に興じたりする。妻の邦恵はそんな夫に失望するでもなく、けなげに明るくふるまっているのだが、なにしろ昨年女の子を出産したばかりだ。息を切らして店から奥へとばたばた往復する邦恵を見てみると、芙美はついこう声をかけてしまう。「ここはいいから、奥へ行って赤ん坊を見てこうし」

店員や品物の数はめつきり減ったが、客の数はかえって多くなっている。特にキヤラメルは注と慰問袋に入れるのに最適といわれていて、何個でもいいから欲しいという客があとをたたない。その人たちにうまく謝るのも万亀の仕事だが、売り惜しみをしているのではないかと疑われたりしてなかなか骨が折れる。あまり疲れると万亀は売り物の氷砂糖を一個口の中にほうり込んで舌の上でころがす。

幼ない頃から、芙美はいま万亀がそうしているように一日中店先に立ち、くるくると働いていたものだ。あまりにも見慣れた光景だったので、なんとも思わなかったが、いざ自分が同じことをすると、どれほどの疲労をもたらすかがよくわかる。

そうかといって万亀は芙美に全面的に同情することができない。寝たきりの老人の後は店の手伝いだ。近所の人々が同情してくれるように、自分はやはり芙美にC重宝がられすぎているような気がする。

「うちで残っているのはあんた一人、あんただけが頼りだ」

と始終芙美は万亀に言うが、同じ類の言葉を嫁の邦恵にもかけている節がある。芙美の言うとおりになって、このまま店を手伝う嫁き遅れになるのはまっぴらだと思う。

あれほど結婚したくないと言い張っていた万亀だが、不思議なことに適齢期を過ぎようとしている今となつては、恐怖感に近いような感情さえわく。町内に何人かいる老嬢の仲間入りだけにしたくなかった。

芙美と万亀との間には、不思議な緊張が続いている。それは注新京の房子から届いた、年賀状が原因だった。

「新年おめでとうございます。今年こそあなたとこの街で暮らせるのですね。父もとても喜んでます。新しいあなたの出発が素晴らしいものでありますように」

このハガキは、注松の内を過ぎた頃に配達されたのだが、手にとったとたん万亀はしまったと思った。

房子との文通の中で、万亀は満州へ行きたいと常に書いてきた。それが昨年あたりから「行けそうだ」に変わり、確か師走に出した手紙には「行くつもりだ」という意味のことを記した憶えがある。しかしそれがこんなかたちの返事になるとは想像もしなかった。

ハガキは他の郵便物と一緒に、店のガラスケースの上に置かれていたから、おそらく芙美は見ただけで知っていた。しかしひと言もそのことを口にしようとはしなかった。

芙美は怖れているのだ。もし今自分が何か言い出せば、母子は激しいやりとりを繰り返すことになるだろう。絶対行かせないと芙美が言えば、万亀は絶対に行くと言えはるはずだ。それにおびえて芙美は口をつぐんでいる。だからなかなか導火線に火は入れられなかった。

芙美と万亀とは、それまではほとんど口喧嘩というものもしたことがなく、争いには慣れていない関係だ。争いに慣れていない者が本気になると、結果がどうなるかは考えてみなくともわかる。結局この母娘は、決定的な時というものをまだ味わいたくはないのだ。

もうひとつ踏んぎりがつかない万亀と、さまざまな質問を言い出しかねている芙美との間には、C芝居じみた時間が流れていった。

「万亀、ご苦労さんだな。こつちへ来て茶でも飲んだらどうだ」

「ありがとう。でもさつき邦恵さんが淹れてくれたからいいよ。お母さんこそゆつくりして……」
そんなふうにして一月も過ぎ、明日は節分という日に、万亀は芙美から座敷に来るように言われた。あらたまつたことを告げるのにわざわざ座敷を使うのは、昔からの芙美の癖だ。いよいよ房子とのことを責められるのだと、万亀は覚悟を決めた。

しかし火鉢の前の芙美はなかなか機嫌がいい。

「あんた、末吉さんを覚えてるら」

末吉というのはその昔、家族同様につき合っていた少年の名だ。

「末吉さんは、あんなことがあって学校をやめちまつたけど、あの後東京の大学を出て立派にやってるんだよ」

それは万亀にとって初耳だった。ストライキのリーダー格として、中学を退学させられた末吉の消息については、最近人から聞いたこともない。この小川屋でも彼はもう忘れられた存在だったはずだ。

「それが今年突然訪ねてきてくれただよ。ちょうどあんたがいない時だったけど、えらい高そうな背広を着てね。なんでも神田の方で出版社をやっているそうだ」

出版社と聞いて、万亀は思わず顔をあげた。幼ない頃から本を愛してきた万亀にとって、出版社という言葉は決定的な価値を持つ。その表情を見逃さなかったのだろう。芙美はいかにも満足気に大きく頷いた。

「あの子を私はうんと可愛がつてやったけど、やつぱりどこか見どころがある子だったねえ。あの若さでね、会社を始めて今じゃ社長さんだからね」

芙美の意図がまだ飲み込めず、万亀は必死で思いをめぐらす。お母さんはいったい何を言いたいのだろうか。彼の自慢をしたいばかりに、自分をこうして呼び寄せたのではあるまい。そして次の瞬間、万亀は思わずあつと声をたてそうになった。

そうだ、そうとしか考えられない。芙美は末吉との縁談を勧めようとしているのだ。昔なじみで出版社の社長といえば万亀が断わるはずはないと踏んだに違いない。

ところが芙美はこんなふうに言葉を続ける。

「奥さんも連れて来たけど、これもいい人でねえ。いかにもいいところのお嬢さんちゅう感じだねえ。私が思うに会社をつくれたのも末吉さん一人の力じゃないらね。きつと奥さんのうちで援助してくれただよ。末吉さんも自分は運がよかつたつてしきりに言っていたもんな」

万亀は次第に苛だつてくる。芙美はどうしてこんな呑気なことを言い始めたのだ。金持ちの娘をもらつて成功した男の話などどうでもいいではないか。

「だから私は、あんたのことを頼んだだよ」

「えっ」

芙美がいきなり結論を口にしたので、万亀は再びあつけにとられる。

「あんたを末吉さんの会社に勤めさせてもらおうと思つてね。このあいだ私が手紙を書いたら、末吉さんから返事が来た。万亀さんなら昔からよく知つてるし、頭がいいつてことはよくわかつてる。万亀さんならぜひ来て欲しいつてな」

万亀は唇を噛んだ。芙美のd狡猾さに、舌をまく思いた。房子からのハガキを読んだ後、芙美はあれこれ策略を使つたのだろう。万亀が大陸へ行くことは、芙美がいちばん怖れていることだ。しかしこのままでは、万亀が決意することは目に見えている。それならばいつそ東京へ出した方がいいと結論を下したのだ。

偶然にも末吉という人物が現れ、万亀の好みそうな「本」や「出版社」という条件が用意された。これなら万亀も文句は言うまいと、芙美は考えたに違いない。

勝手に人のことを決めて。私がいつもお母さんの言うとおりになると思つたら大間違いだよ。そんな言葉がいくつも喉のあたりに飛びかう。けれども万亀はためらっている。

D芙美が賭けているように、自分もこの事実賭けなければいけないのではないだろうか。母親に反抗し、ぶいと席をたつことは簡単だ。けれどもそうしたら、他にどんな道が残されているというのか。明日も今日と同じような日がやってくる。店に立ち、餅菓子や練り切りを包み、その合い間に秋次の子どもの頭を撫でたりしているうちに日が暮れる。

今でさえ「嫁ぎ遅れ」と陰口を叩かれ、やつぱり女が学校を出るとむずかしくなるのだと近所の人たちは言い合っているのだ。戦争も長びきそうだし、これから先、楽しい日常がやってくるとはどうしても思えない。

いつそのこと本気で新京へ行こうか。ここでまた万亀の心はかなり萎える。女ひとりで大陸へ向かう勇気が、本当に自分の中にあるかと言えば、必ずしもそうではないところが、万亀の行動をすべてにぶくしているのだ。房子への手紙に、もう三年ごしにわたって、「きつと行く、きつと親を説得してそちらへ行く」と書いているものの、芙美に切り出したことがない。それが何よりの証拠ではないか。その上唯一頼りにする房子自身も、嫁入り前の頼りない存在だ。いつ別の土地へ嫁ぐかわかったものではない。それより何より、東京の出版社という言葉には、e 抗いがたい魅力がある。

とにかくここを出ればいいのだ。万亀はそう決心することにした。

(注) 1 慰問袋―戦地の兵士を慰めるために、日用品や手紙を入れて送った袋。

2 新京の房子―新京はかつての満州国の首都。房子は万亀の同級生で、今は新京で暮らしている。

3 松の内―正月の松飾りのある間。

問 1 傍線部 a～e の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

問 2 傍線部 A「どうしてこれほど泣けるのだろうかと自分でも不思議に思ったほどだ」とあるが、このときの万亀についての説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 祖母を最期まで看病したことを母から労われたことで、かえって内心では祖母の世話を面倒に思い祖母が亡くなることすら望んでいた自分の薄情さを痛感し、申し訳なく思っている。

② 祖母の世話のかたわら何よりも好きな本を好きなだけ読めるという幸せを得ていたのに、その生活が変わることに落胆を禁じ得ず、今後の指針が失われたように感じられている。

③ 祖母の死に言い知れぬ悲しみを覚える一方で、ようやく満州へ行けることになったと思うものの、いざ出発するとなると踏ん切りがつかない優柔不断な自分に嫌気がさしている。

④ 祖母の死がただ悲しいだけでなく、祖母の存在を荷厄介に思いもしたことに自責の念を抱くと共に、祖母の死によって自由になったはずの自分の将来に不安を募らせてもいる。

問3 傍線部B「万亀がいつのまにか店を切り盛りするようになった」とあるが、「店を切り盛る」する」「万亀」についての説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 母に頼まれて実家の仕事を手伝うことになったが、目が回るほど忙しい毎日のなかで疲れ果て、いまこの過酷な現実から逃れるために、本気で考えているわけでもない満州行きをばんやりと夢想するようになっていた。

② 自分が店を預かってみると、かつての芙美の苦勞も身に染みるが、客あしらいに疲弊し、家族に配慮しをする慌ただしい日々を追われ、芙美にうまく使われてこのまま結婚することもなく年を重ねていくことに不安を感じている。

③ 商品の原料集めに駆け回る母や、生来ものぐさで遊び好きな兄に代わって、しかたなく店を切り回す役割を担ったものの、そのあまりの大変さに疲労感が募り、自らの将来の不確かさもあいまって、自暴自棄に陥りかけている。

④ 品物が手に入りにくい状況のなかで難癖をつけてくる客とのやり取りに追われることに疲れ、生まれたばかりの赤ん坊の面倒を見ることにかまけて店を手伝おうとしない兄嫁や、彼女に甘い母に反感を抱いている。

問4 傍線部C「芝居じみた時間が流れていった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 万亀が満州に来ることを歓迎する同級生の手紙が届いたことをきっかけに、芙美と喧嘩することだけは避けたいと思う万亀は何かと芙美の機嫌を取ろうとし、芙美はそうした方にどう対処したらよいのか思案に暮れ、互いにぎこちない振る舞いをしてしまっているということ。

② 万亀が満州に来ることを歓迎する同級生の手紙を芙美が見たことをきっかけに、英美はどうしたら万亀を止められるかと心を悩まし、万亀は芙美に知られた以上覚悟を決めて芙美を説得するしかないと考え、二人の間に緊迫した空気が張りつめているということ。

③ 万亀が満州に来ることを歓迎する同級生の手紙が届いたことをきっかけに、それに反対する芙美は万亀から満州に行くことを恐れることを恐れ、万亀は行く決心がつかねて芙美に言い出せぬまま時を過ごし、互いに争いになることを避けて何食わぬ風を装っているということ。

④ 万亀が満州に来ることを歓迎する同級生の手紙を芙美が見たことをきっかけに、万亀は不注意から自分の本心を芙美に知られたことに気落ちし、芙美はいよいよ万亀が満州に行く決意をしたことを知って気が動転し、互いにうまく話を切り出せずにいるということ。

問5 傍線部D「芙美が賭けているように、自分もこの事実には賭けなければいけないのではないだろうか。」とあるが、このときの万亀についての説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 芙美は、万亀の希望にかなう仕事を用意することで、彼女を自分の言いなりにしようとする策略を練っている。一方で万亀も、何度訴えても満州に行かせてくれない母のもとを出るために、自分を認めてくれる末吉を頼るしかないのではないかと思っている。

② 芙美は、万亀を満州に行かせたくないという気持ちを汲んで彼女を雇ってくれる末吉の温情にすがりついている。一方で万亀も、未知な異郷に行くよりは自分の能力を認めてくれる末吉を頼ってなじみのある東京に行く方がよいのではないかと思っている。

③ 芙美は、万亀を自分の手の届くところに置いておこうとして、何とか彼女の思いを改めさせようとする。一方で万亀も、芙美の言う通りにする方が自分の将来のためになると思いつつも、自分を束縛してきた芙美に反抗するのは今しかないのではないかと思っている。

④ 芙美は、自分の意に反した生き方を万亀にさせないために、彼女の好みそうな話を用意して巧みに手を回している。一方で万亀も、閉塞した状況から逃れるためには、母の用意した話に乗じて思い切った決断をしなければならないのではないかと思っている。

三 次の語の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

1
倫理

- ① 人として守り行うべき道。
- ② 論理的に考えを進めること。
- ③ 人類の過去の歴史。
- ④ 最も高い人間の地位。

2
想起

- ① 想念を呼び覚ますこと。
- ② 早い時期に始めること。
- ③ さまざまなことを想像すること。
- ④ 過去のことを思い起こすこと。

3 合理性

- ① 道理とは一線を画すこと。
- ② 道理にかなっていること。
- ③ 道理として仕方なく認めること。
- ④ 道理に合わないこと。

4 概念

- ① 物事について確実性の高い考え。
- ② 物事についてのわかりやすい解説。
- ③ 物事についてのおおよその考え。
- ④ 物事についての細かな部分

5 営為

- ① 人間の意識的ないとなみ。
- ② 動物が巣を作ること。
- ③ 着実に築き上げた実績。
- ④ あくせくと働くようす。

四

次の傍線部の単語のここでの意味を答えなさい。なお、文意に沿って訳をすること。

- 1 しばし心に隔て残したることあらむもいぶせきを、その夜はうち休みて明かし給ひつ。
- 2 按察使の大納言の御むすめ、心にくくなべてならぬさまに、親たちかしづきたまふこと限りなし。
- 3 はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、我ながらうれし。
- 4 このちこのかたちけうらなること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。
- 5 ただこの西表にしも、持仏すゑ奉りておこなふ尼なりけり。
- 6 よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへど、しるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、
- 7 うれしきもの。まだ見ぬ物語の一を見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、残り見出でたる。
- 8 日ごろ、月ごろ、しるき事ありて、なやみわたるが、おこたりぬるもうれし。
- 9 すずろに飲ませつれば、うるはしき人も、たちまちに狂人となりて、
- 10 大君は 神にしませば 天雲の 五百重の下に 隠りたまひぬ

五

次の各問いに答えなさい。

問一 次の傍線部のうち、完了の「り」はどれか。適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人知れずうち泣かれぬ。

イ 情けなき御心にぞものし給ふらん。

ウ 年ごろ、常のあつしさになり給へれば、

エ 中堂より御香たまはりぬ。

問二 次の傍線部のうち、推量の「む・むず」はどれか。適当なものを次の選択肢の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア さるべきついでもありなむ。命長くところ思ひ念ぜぬ。

イ 忍びては参り給ひなむや。

ウ もしこのこと、漏れぬるものならば、行綱まづ失はれなんぞ。

エ 既に十二三にならむずる者が、今は礼儀を存知してこそふるまうべきに、
才師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。

問三 次の傍線部のうち、伝聞・推定の「なり」はどれか。適当なものを次の選択肢の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア また聞けば、侍従の大納言の御女亡くなり給ひぬなり。

イ 傍らなる足鼎を取りて、頭に被きたれば、

ウ 見し人なりけり。

エ 秋の野に人まつ虫の 声すなり われかと行きて いざとぶらはむ

オ 牛すでにしかなり。

問四 次の各文の傍線部をそれぞれ品詞分解しなさい。

ア 盛りにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。

イ 早く往なむとて、

〔六〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（妻がふと部屋を見ると、首を取って鏡台に掛け化粧をしていた。）

（妻は）主の殿（＝夫）に、「かかること侍るをば、いかが計らひ給ふぞ」と言へば、「まづ何となく暇を出だせ」と言ふほどに、女を近づけ、「近ごろ言ひかね侍れども、人多く侍れば、『一人も二人も暇を出せ』とのたまふ間、そなたのやうなる重宝の人はましまさぬほどに、いつまでもと思へども、いづれも譜代の者にて、⁴暇出だされぬ者どもなれば、まづまづいづ方へも出でられ候へ。そのうへ、夫の命背きがたく侍れば、重ねて娘嫁入りの折節は迎へ侍ら⁵ん」と言ふ。その時、女、⁵気色変はりて、「さては、何ぞご覧じて、かく仰せ候ふやらん」と、そばへ近く居寄れば、「その方は何事を言ふぞ。またやがてこそ呼び侍らめ」と、⁶さりげなくのたまへども、「いやいや、曲もなきことなり」とて、⁷飛びかかりけるところを、男、⁸かねて心得けるにや、後ろに立ち添ひけるが、刀を抜き、はたと切る。切られて弱るところを引き直し、心のままに切れば、年経たる猫なり。

（『曾呂利物語』より）

問一 二重傍線部A「侍れ」C「候へ」の敬意の方向をそれぞれ答えなさい。

問二 二重傍線部B「なれ」D「ん」の、ここでの意味をそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部1「暇を出だせ」とあるが、なぜそのような指示を出したのか。その理由として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女は尋常ならざる存在であり、自分たちと同じ空間にいて頂くのは不敬だと考えたから。

イ 女は人間とは違う存在であり、到底自分たちと居を共にすることは受け入れがたいから。

ウ 女は正体不明の存在であり、差し当たり辞めさせて、相手の出方を知らうとしたから。

エ 女は異形の存在であり、一刻も早く退治しなければならないと判断を下したから。

問四 傍線部2「重宝の人」3「譜代の者」とはそれぞれ誰を指しているか答えなさい。

問五 傍線部4「暇出だされぬ」7「飛びかかり」の動作主を答えなさい。

問六 傍線部5「気色変はり」を口語訳しなさい。

問七 傍線部6「さりげなくのたまへども」とあるが、なぜそうしたのか。その理由として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女の今後の身の振り方について、優しい言葉で伝えたかったから。

イ いきなり相手の正体のことについて触れることは憚られたから。

ウ 自身が説明した内容を、女が正しく理解していない様子だから。

エ 自分が女の正体を知っていることを悟られまいとしたから。

問八 傍線部8「かねて心得けるにや」の解釈として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前から、緊急時の為に刀を磨き剣術の鍛錬に努めてきたのであろうか。

イ 前もって、妻からの依頼を受けていたのであろうか。

ウ 以前から、自分の出ていく機会をうかがっていたのであろうか。

エ 前もって、女が何か危害を加えるかもしれないと予想していたのであろうか。

〔七〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この阿闍梨は、冷泉院にも親しく、さぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例の、さるべき文など御覧じて問はせ給ふこともあるついでに、「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟り深くものし給ひけるかな。心深く思ひすまし給へるほど、まことの聖の掟になむ見え給ふ」と聞こゆ。「いまだかたちは変へ給はずや。俗聖とか、この若き人々の付けたんなる、あはれなることなり」などのたまはす。

宰相の中将も、御前にさぶらひ給ひて、我こそ、世の中をばいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど、人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れと、人知れず思ひつつ、俗ながら聖になり給ふ心の掟やいかにと、耳とどめて聞き給ふ。「出家のこころざしはもとよりものし給へるを、はかなきことに思ひとどこほり、今となりては心苦しき女子どもの御上をえ思ひ捨てぬとなむ、嘆き給ふ」と⁴奏す。

〔『源氏物語』による〕

問一 傍線部1「さぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり」の口語訳として、最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お仕え申し上げて、仏教の經典なども教えていると噂の人であった。

イ お仕え申し上げて、仏教の經典などを教え申し上げる人であった。

ウ お仕え申し上げて、仏教の經典なども貴族にお教えなさる方であった。

エ お仕え申し上げて、仏教の經典などを教わっていると名高い人であった。

問二 傍線部2「俗聖とか」とあるが、八の宮が「俗聖」と呼ばれているのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信心深い様子とは裏腹に、剃髪をせずに煩惱を保ったままだから。

イ 本当の聖とは似ても似つかわず、大変滑稽に見えるから。

ウ 僧侶の真似事をしてはいるが、それは体裁を保つ為だから。

エ 出家をしないまま、心から深く仏道に専念しているから。

問三 傍線部3「思ひとどこほり」とあるが、どういうことを言っているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 阿闍梨が八の宮の現状を伝えるのをためらっていること。

イ 阿闍梨がお経を冷泉院に教えるのをためらっていること。

ウ 八の宮がすぐさま出家するのをためらっていること。

エ 八の宮が仏道修行を中断するのをためらっていること。

問四 傍線部4「奏す」について説明した次の文章の空欄に、適当な語をそれぞれ補いなさい。

「奏す」は「言ふ」の（ 1 ）語で、必ず（ 2 ）に対する敬意を表す絶対敬語である。

問五 宰相の中将の心情として最も適当なものを、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 八の宮がいささかうらやましい

イ 八の宮がとても気の毒だ

ウ 阿闍梨が何となく魅力的だ

エ 阿闍梨は言いようもなく軽率だ

高三 第一学期実力試験

国語

クラス

番号

氏名

※提出先↓平塚先生

三		二		一	
問四	問一	問二	問一	問二	問一
1		a		a	
2	問三	b	問三	b	
3	問四	c	問四	c	
4	問五	d	問五	d	
5		e		e	

七		六			五		四				
問四	問一	問六	問四	問二	問一	問四	問一	8	5	3	1
1			2	B	A	イ	ア				
	問二										
2			3	D	から						
	問三							9	6	4	2
問五		問七	問五	問三	へ						
			4		C						
		問八						10	7		
			7		から						
					へ						